



特定非営利活動法人 イカオ・アコ

愛知県東海市 <http://ikawako.com/>

活動名 フィリピンの水源地域におけるサトウキビ畑の有機農業への転換



理事
倉田 麻里さん
(若手PL4期生)

若者たちが国際協力の現場へ 一歩踏み出すきっかけの場を提供



現地にいるときは、可能な限り現場に出向き、住民と話をしてニーズを引き出す

赴任当初は、現地職員は一人もいなかった。私は大学院時代に多国籍の学生が共同生活する寮に住んでおり、そこで海外で働きたいという思いが芽生え、NPOの駐在員になる道を選択。大学院修了後、現地駐在員としてフィリピンのネグロス島へ行きました。

現地職員ゼロから出発し 国際協力センター設立

当団体は、日本人とフィリピン人が手を取り合って持続可能な社会をつくることを目指し活動しています。私は2008年から約10年間、現地駐在員としてフィリピンで活動していました。17年に帰国し、現在は日本で事務局業務を担いつつ、年に4、5回フィリピンへ行き活動をサポートしています。



フィリピンの市役所にてミーティングの様子

私は大学院時代に多国籍の学生が共同生活する寮に住んでおり、そこで海外で働きたいという思いが芽生え、NPOの駐在員になる道を選択。大学院修了後、現地駐在員としてフィリピンのネグロス島へ行きました。

ず、自宅の一部をオフィスとして利用する状態でした。最初に取り組んだのは「マングローブの植林の定着率向上」で、そのための植林地選定、土地に適した苗木の準備、植林、メンテナンスと、全ての過程で住民の協力が不可欠でした。何度も植林地に足を運び、試行錯誤するうちに、少しずつ他の現地のニーズにも気づくようになり、そこからはいくつものプロジェクト提案書をひたすら作成する日々です。食品加工施設をつくり、女性に調理の研修をする事業、養豚・養鶏事業、農地と住宅に湧水を供給する事業などを展開。現地職員も一人二人と増やし、現地の事務局の体制も整えていきました。

後も多く若者たちに、国際協力の現場に一歩踏み出すきっかけの場を提供していきたいと考えています。

当団体では現地に駐在して活動を推進するインターンや、国際協力を学びたいという若者のための国際協力センター研修生を常時募集しています。今後多く若者たちに、国際協力の現場に一歩踏み出すきっかけの場を提供していきたいと考えています。

若手PL研修で学び、 日本の事務局機能を構築中

私は17年から若手PL研修に参加しています。フィリピンでの10年間で、自分もっているものを出し切った感じがあったため、ここでまた新たな視点を取り入れたいと考えたからです。若手PL研修で最もためになったのが、NPOの事務局のありかたについて学べたことでした。当団体は設立20年になりますが、実はこれまで現地活動に重心を置いてきたために、事務局の機能があまり働いていませんでした。これから事務局をつくっていくようにしたいと考えています。研修は非常に有益であり、今まさに学んだことが活かされています。



特定非営利活動法人 トチギ環境未来基地

栃木県芳賀郡益子町 <https://www.tochigi-cc.org/>

活動名 若者ボランティア育成・マッチング制度による、活動団体の「高齢化」、「後継者不足」問題の克服を通じた森林・里山保全活動強化事業



若手PL2期生
神 彩乃さん
(若手PL2期生)

今の若者にとってボランティアは 当たり前選択肢の一つになっている

私が環境保全活動に興味をもったきっかけは、東日本大震災の復興支援ボランティアに参加したことでした。被災地で側溝の泥出しや家屋の片付けなどさまざまな活動をするなかで、漁業を再開するまで林業に携わるグループを手伝う機会があり、そこで「海と森はつながっているから、森をきれいにするには、いづれ漁業を再開したときいい魚が捕れるようになる」という話を聞きました。海と森が繋がっていることは学校で習いましたが、時間がかかるそのプロセスを本当に実践していることに衝撃と感銘を受け、それが今の環境保全活動につながっています。当団体では年に2回、3か月間の合宿型ボランティアを受け入れています。彼らが中心となって栃木県内数か所の森林・里山を整備しており、現在、私はその作業計画作成や現場マネジメント、広報などを担当しています。当初は現場での整備活動がほとんどでしたが、若手PL研修で計画の立て方や広

復興支援ボランティアから 環境保全活動の道へ

私が環境保全活動に興味をもったきっかけは、東日本大震災の復興支援ボランティアに参加したことでした。被災地で側溝の泥出しや家屋の片付けなどさまざまな活動をするなかで、漁業を再開するまで林業に携わるグループを手伝う機会があり、そこで「海と森はつながっているから、森をきれいにするには、いづれ漁業を再開したときいい魚が捕れるようになる」という話を聞きました。海と森が繋がっていることは学校で習いましたが、時間がかかるそのプロセスを本当に実践していることに衝撃と感銘を受け、それが今の環境保全活動につながっています。当団体では年に2回、3か月間の合宿型ボランティアを受け入れています。彼らが中心となって栃木県内数か所の森林・里山を整備しており、現在、私はその作業計画作成や現場マネジメント、広報などを担当しています。当初は現場での整備活動がほとんどでしたが、若手PL研修で計画の立て方や広



神さんは「私たちの役割は、森林・里山と人をつなぎ、人と人をつなぐこと」だと語る

報の手法を学び、今、研修で得たものを組織へ還元しています。

活動の楽しさにはまった人を 担い手として育む

ボランティア参加者の半数以上が森林・里山での整備作業は初めてですが、現場がきれいになっていくことや参加者同士のコミュニケーションの楽しさにはまると、何度も参加してくれず慣れたところから「この人は初めてだからサポートしてね」と簡単なリーダー役を依頼。それを重ねることで、作業の技術だけでなく、他者と活動するノウハウやリスクマネジメントも理解し実践できるようになっていきます。初めから「環境を守りたい」と熱意をもって人は少数ですが、私自身がそうだったように、何がきっかけで環境保全に興味をわくかは分かりません。だからこそ、私たちは今後も小さなピースを散りばめていくように情報を発信していきたいと考えています。



経済的な理由による子どもの体験の機会の格差をなくしたいという思いから、子どもたちへの自然体験活動にも力を入れている



助成団体の中から、環境保全活動の現場に飛び込んだ若者の声として「若手プロジェクトリーダー研修生(若手PL)」が活躍する2団体と、今まさに若者を取り込む活動に力を入れている2団体を紹介します。

青少年の意見を取り入れた活動により 八代海のすばらしい環境を次世代につなぐ



河川ごみ拾いイベント終了後、参加者全員で撮影

「次世代の子どもたちが健康で安全な生活を送れるように」をコンセプトに設立された当団体は、子どもごみパトロール隊や河川学習など、子どもや青少年が参加する企画を数多く実施しています。なかでも2018年まで毎年開催していた「かき殻まつり」は、かき殻を使った河川浄化と環境学習を目的としたイベントで、最も多いときは800人以上が参加。そのほとんどが八代市内の高校・高専生でした。前年のかき殻ネットを引き上げ、新しいネットを投入するのは重労働ですが、男女問わず川の中で顔に泥をつけながら一生懸命作業する姿に感動しました。



かき殻まつりの様子。きついきたくない作業でも熱心に取り組む高校生

今、私たちが目指しているのは、青少年の企画により、河川・浜辺のごみ拾いと干潟ワークショップを開催することです。なぜ「青少年が企画すること」にこだわるのかというと、彼らは大人が考えつかないような視点をもっているため、青少年のアイデアを取り入れることで、今後の活動の幅を広げることが期待できるからです。

また私たちが目指す八代海のラムサール条約^④登録は、一過性のものではなく、環境が維持される限り永続的なものです。大人だけで考えるのではなく、登録を目指す段階から青少年に関心をもってもらい、彼らの意見を取り込むことで、八代海のすばらしい環境を次世代につなぐことができると思っています。

やさしいエコワード講座

- ①6次産業化……農林漁業者(1次産業)が食品加工(2次産業)、流通・販売(3次産業)にも取り組み、農山漁村を豊かにしていくとする取り組み。
- ②巻き狩り猟……銃器を用いた狩猟方法の一つ。捕獲作業を指示する「指揮者」、待機し獲物を撃つ「射手」、獲物を追い出す「勢子」がグループとなり、イノシシやシカなどを狩る。
- ③罾猟……罾を使う狩猟方法。「箱罾」「くり罾」など様々な罾がある。
- ④ラムサール条約……正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。渡り鳥を保護するために、国家間で協力して水辺の自然を保全するための環境条約。

私たちはイベント等を実施する際、市内の高校全8校を訪ね、校長や担当教諭に活動の趣旨を説明して参加を求めます。またイベント後には、各学校にお礼状や記録写真などを届け、次回の参加につなげていきます。ただ残念なことに、八代市内には大学がなく、進学や就職をきっかけに、若者の多くが市外に流出。小・中・高校生に八代海や球磨川の環境保全の教育機会を設け、意識づけをしても、地域で将来的に行動につなげてもらうことが難しいのが現実です。しかし市外に引っ越しても、子どものうちに身につけた環境保全の意識は生き続けます。広い視点で見れば、私たちの活動が決して無駄にはならないことを期待し、今後も未来を担う青少年へ自然環境の素晴らしさを伝えていきます。

講習会や体験イベントを入り口にして 狩猟の世界に若い人材を引き込む

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた牡鹿半島の蛤浜を再生し、次世代に残していくために、私たちは2012年に「蛤浜再生プロジェクト」をスタートさせました。「カフェはまぐり堂」を拠点に、飲食店、セレクトショップ、マリッジジャー、林業・家具製造など幅広い事業を展開し、16年から「狩猟の6次産業化^①」にも取り組み始めました。増えすぎたニホンジカを捕獲し、鹿肉の販売や狩猟工コッリズムも導入して狩猟の経済的自立を目指すもので、その一環として、今、猟師を増やす試みをしています。

石巻市周辺部に生息するニホンジカの数、自然植生に影響が出ない密度を大きく超えています。想定自然増加数に対して捕獲頭数が不足している現状ですが、15年の市の猟師の数はピーク時の6分の1となり、高齢化も進行。放っておけば里山の荒廃が進み、生物多様性も保てなくなるため、新たな猟師が必要とされています。

とはいえ、新たに狩猟を始めるのは簡単ではなく、狩猟に抵抗感をもつ人が少なくありません。そこで当団体では、石巻エリアで一般的な猟銃による



座学だけではなく、実際に森に入り罾の説明などもする

巻き狩り猟^②ではなく、罾猟師^③の育成に力を入れることにしました。猟銃を所持する必要がないため、入門のハードルが低いだらうと考えたのです。

罾猟師を増やすために実施しているのが、「捕獲技術講習会」と「罾体験イベント」です。講習会は狩猟免許所持者が対象で、捕獲効率を上げるテクニックなど実践的な内容です。一方体験イベントは狩猟に興味はあるものの免許は保持していない人が対象の気軽な内容です。参加者はSNSなどで募り、傾向としては20〜40代が最も多く、女性も4割ほどいます。参加者からは「思ったよりもお金がかかりそう」と



「解体技術講習会」も実施している。どの企画も予想より女性の参加が多かったという

いった意見もあったものの、多くは「縁遠かった狩猟の世界が少し身近になった」「鹿の害に困っているからやってみたい」など好評でした。イベント参加後に狩猟免許を取得した人も出るなど、一定の効果が出ています。

狩猟に限らず一次産業全般で人材不足が叫ばれている今、特に若い人は自然と関わった暮らしが縁遠くなっていると感じます。今後もイベント等の機会を通じて、狩猟や有害動物駆除、野生動物との関わりに興味がある人に向けて、もっと扉をオープンしていきたいです。閉ざされた世界や特殊な世界だと思われがちですが、実ははるか昔から暮らしのそばに存在しているものなので、私たちがその接点となっていきたいです。